



幼い頃から無類の鉄道好き Nゲージを楽しむ

やまもとまさし

山本昌志さん

運転士・JR北労組小樽支部書記長



「川に架かる鉄橋」は山本さん自慢のボードだ

銭函駅^{せんぐん}を通過すると海岸線が開ける。函館本線朝里駅^{あさり}に、JR北労組本部教宣部長の漆山健次さんと、今回の主人公・山本昌志さん（四三歳）が出迎えてくれた。

自宅マンションに着くと、早速、分厚い特製段ボールに納めた分割式レイアウト（ボード）を取り出し、見せてくれる。山合いのトンネルが二つと、大きな川に架かる鉄橋の三つのボードだが、もう目が輝いている。

山本さんは余市町に生まれ（一九七三年）育った。父親の兄が国鉄の車掌をしていた影響か、赤ん坊のころから鉄道に強い興味を示した。家業が商店だったので親戚の叔母が子どもの面倒をみてくれ

ていた。この叔母さんは、いまでも親戚の者が集まると、必ず「この子がぐずるときは、おんぶして駅に連れて行き、列車を見せると泣きやみ、機嫌がよくなった」と披露し、笑いを誘っている。

小学校に上がるころには余市駅の発車時刻を覚え、汽笛の音でどの列車であるかを聞き分けていたという。

数年前、中学校のクラス会があった。幼馴染みの女の子が「小学校低学年のころ、公園で遊んでいたら、マー君が突然、列車が来るから見に行こうと言出し、女の子三人が駅に連れて行かれた」と言った。まったく記憶がなく、そんなはずはないと思ったが、彼女は列車が見えなくなると、また公園に戻って遊んだ

ことまで覚えていて、苦笑するしかなかった。

思い出は「列車と共に」の鉄道大好き少年が、プラレールからNゲージへと成長するのは、小学六年生のときだった。

*

鉄道以外の就職は考えられず、一九九四年、JR北海道の採用試験を受け、合格する。一年間、札幌運転所電車検修に在籍したのち、小樽運転所に転勤、待望の運転士となった。

夢が叶ったのだから、仕事に関する質問は野暮だろうと思いつつ聞いてみた。

「北海道の冬場は降雪の日が多く、定時運行が難しくなる。吹雪で視界不良となり信号確認ができなくなるので、速度を落とさざるをえないのです」

「山線区間（小樽～倶知安～長万部）は列車本数が少なく、一～二時間に一本しか走らないため、積雪で線路が埋もれてしまう。すると、雪の抵抗で速度が上昇しなくなります。立ち往生したら悲劇の始まりで、除雪車が到着するまで最低一時間はかかりますから、申し訳ないけれど、お客さんは車内で缶詰状態です」

「秋は落ち葉で上り坂を上がれないことがある。山線区間は二〇〇／一〇〇〇パーミル（二〇〇〇メートル進むと二〇メートルの高低差）の急勾配がある線区のため車輪が滑って空転、速度が失速する。」



DD51 機関車

万が一、止まってしまつて、砂を撒いて
 一歩一歩進むような感じで上つて行く。
 速度計がゼロで進行することもある」

北海道のローカル線（札幌圏以外）は
 ほとんどが一〜二両編成のワンマン運転
 で、自然災害・悪天候以外にも、鹿など
 の野生動物が出没し、つねに緊張を強い
 られる職務である。それでも安全運行は
 自分の使命だと思つている。

*

山本さんは今年一月三日、誠実な職
 務遂行と優秀な技術により「安全乗務記
 録七五万キロを達成した」として、会社
 から表彰されている。

いまやベテラン選手士だ。それがなぜ
 Nゲージなのか。答えは明快だった。
 「単純に、好きだからです」

札幌市内の会館を借りて、二カ月に一
 度「運転会」を楽しんでいる。

「仲間が六人。JRに勤務していない人
 もいて、いつも和気藹々です。連絡はS
 NSでやりとりし、企画した人がコース
 を立案する。とくに役割分担は決まらな
 いが、各自担当ボードを運び込んで
 効率よくセッティングしていきます」

走らせる車両は、それぞれお気に入り
 のものを持ち寄る。

山本さんは北海道内を走る車両が中心
 で、「カシオペア」「北斗星」「トワイラ
 イトエクスプレス」などの特急列車、あ
 るいは貨物列車や自分が乗務する「キハ
 四〇」など、約五〇〇両ほどを所持して
 いる（正確な数は把握していないとい
 う）。応接間の特注棚に自慢の車両をず
 らりと陳列したさまは、壮観というほか
 ない。

「これは一九八六年以前に走っていた車
 両です。どこが違うかわかりますか？」
 と漆山さんに聞く。さすがに、ずぶの素
 人に説明しても無駄だと諦めたようだ。

「郵便車が連結されているでしょ」

「えっ、どこに？ あっ、これはレアも
 のだ」と漆山さんが驚いている。全国の
 郵便車は一九八六年に廃止された。



年に1度の「泊りがけ運転会」は各自が気儘に楽しむ

*

今年一月、山本さんは家族で東京旅行
 をした。そのときも、往復飛行機ではな
 く、行きは「カシオペア」に乗った。車
 内の豪華な雰囲気、奥さんも娘さん
 二人も大喜び、満足してくれた。だが、
 「趣味は家族の理解も必要と言います
 が、わが家の場合半分呆れているので
 しょうね」とちよっぴり気弱な表情もみ
 せる。

年に一度、仲間と二泊三日のNゲージ
 運転会に出かける。同じように、毎年一
 回東京へ行き、秋葉原の鉄道模型店でパ
 ーツを物色する。大宮の交通博物館には
 三度訪れている。次は四月にオープンし
 た京都の鉄道博物館に行こうと計画して
 いるようだ。

「でも、なるべく鉄道マニアとわからな
 いように、心がけています」
 ——なぜ？

「鉄道マニアには、どうしてもオタクと
 いうイメージが付きまとうでしょ、それ
 がイヤなんです」

たしかに、小樽支部書記長を務める山
 本さんは、オタクとは無縁の爽やかな青
 年である。

「明日（六月二八日）、JR東日本の電
 気検測車イーストID（キヤE一九三
 系）に乗務します。指導員付きですが
 ね」

また、キラリと目が輝いた。

取材構成・神田三郎
 写真提供・山本昌志